平成三十年夏の收穫（坤）

土屋　博

Ⅱ　東京古書會館關係

九「漢學捷径」佐藤仁之助著

（東亜堂書房、明治四十三年刊、正價金壹圓貳拾錢、本文四四〇頁）

古書價格二百圓也。漢文讀書法には、素讀、聲讀・默讀、諳誦、抄書の四法あり。漢文講書法には、講書式（大意、字訓、字義、解釋、餘論）、會讀（研究の目的を以て數人以上相會して互に討論）、輪讀（研究志望の同志相會して互に講說）の法ありとぞ。

十「中等教科　新撰漢文參考書卷一」

（元元堂、明治四十三年刊、非賣品、作家小傳四四頁十參考書九二頁）

古書價格二百圓也。賴山陽の「十有三春秋」の詩の解說には、年の少きを「春秋に富む」と云ひ、年老いたるを「春秋高し」といふとあり。出所はそれぞれ史記及び戰國策の由。

十一「中學漢文辭典」石井喜十郎著

（大正圖書、大正貳年刊、正價金壹圓、二六三頁）

古書價格二百圓也。冒頭に偏、旁（つくり）、冠等の音訓掲げらる。亠（し、こん）、亠（とう、づ）、儿（じん、かい）など興味深し。辭典の部はいろは順にて、最初の項目は井上蘭臺、最後の項目は醉翁亭記なり。

十二「訂正　高等漢文讀本卷一資講」第三高等學校福永亨吉著

（京都若林春和堂、大正十年訂正第四版、一四八頁）

古書價格二百圓也。我が父も三高に學びたれば、かくなる伝統を継承せしかと感慨一入なり。耶馬溪圖卷記の「畫を讀む」とは畫を品評するの謂にして、一說に畫中に詩有る故に讀むと曰ふ由。

十三「國語漢文　學修要覽」伊井松藏著

（開隆堂、昭和五年刊、定價五拾錢、本文一七三頁）

古書價格四百圓也。目次は、日本文學年表、名著要覽、現代作者要覽、官職要覽、和漢名數、年中行事、修辭、日本文法、假名遣、國語表記表、難訓、同訓異義、漢語、漢字、國字、漢文法、漢文名著要覽、俳諧系統表、現代和歌系統表、皇室系譜、將軍及執權系圖。

Ⅲ原書房のワゴンより

十四「操觚實用文壇寶典　要字鑑　全」

（興文社、明治三十二年三版、定價金壹圓、六三七頁）

古書價格千圓也。初版は明治二十五年。試みに我が名前「博」につき見るに、「幅のひろきこと、禮記に帶の博さとあるが如き是れなり。轉じて手びろき意、論語に文を博く學び、とあり、後世は博聞、博物、博愛など多くは德業の方に用ふれども、古書には廣の字と全く差別無しと。

十五「故事熟語字典　全」陸軍教授平野彦次郎著

（東京金昌堂、明治三十六年再版、定價金壹圓廿錢、七一二頁）

古書價格五百圓也。「博」につきては、ハの部十一畫として、博士、博文約禮（論語雍也篇）、博奕（論語貨陽篇）の三項目掲載せらる。

十六「支那文學概論講話」文學博士鹽谷溫著

（大日本雄辯會、大正十五年十版、定價金五圓、本文五四〇頁）

古書價格五百圓也。初版は大正八年。鹽谷溫博士（一八七八年生れ、一九六二年歿。父は漢學者鹽谷青山、大伯父は江戸末期儒學者の鹽谷宕陰）の著作は蒐集し甲斐のある教訓に富む內容なり。序言に曰く、「大正六年夏東京文科大學に第一回夏季公開講演の開かるゝや、余は支那文學概論を演述せり。雄辯會主野間君余と舊あり、その筆記を刷印に付せんと請ふ」と。

十七「志士遺文集」

（雄山閣、昭和十四年刊、一九五頁）

古書價格五百圓也。日本學叢書の第十卷。藤田東湖、吉田松陰、橋本左內、佐久間象山、高杉晉作らの遺文集。平泉澄博士による周到なる解說冒頭にあり、吉田松陰の「天下は一人の天下に非ざるの說を評す」の一文は、民主革命思想に痛烈なる批判を下したるものにて、妄說裁斷の鮮やかさ、殆ど正宗の切れ味を見る心地する由。また、高杉東行の「幽室記」につきては、人は兎角豪邁の気象のみを見がちなるも、幽室記を熟讀せば、その精神を養はるゝ事の深さに驚嘆せむと。

Ⅳ三省堂八階特設古本市

十八「和文　產語」太宰純著、吉田松陰愛讀之書

（研學會、明治三十年刊、本文二百頁）

古書價格三百圓也。原著者は太宰春台（一六八〇年生れ、一七四七年歿）。冒頭部分より、「鳥の鷇（ひな）たるや母の哺に待つことあり、馬牛の駒犢たるや母の乳に待つことあり、其の能く飲啄茹芻するに及んでや、食を求むるの法を知らざるはなし、唯だ人の子か、生れて父母の懷に在ること三年、而して父母の子に於けるや、父哺撫育其勞之より大なるはなし」と。

（平成三十年九月八日受附）